聖書と説教　　2024 年 7 月 14 日（日）聖霊降臨後第 8 主日

新約聖書 マルコによる福音書 6 章 14 節―29 節（新共同訳）

14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が
彼に働いている。」15 そのほかにも、「彼はエリヤだ」と言う人もいれば、
「昔の預言者のような預言者だ」と言う人もいた。16 ところが、ヘロデはこれ
を聞いて、「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」と言った。
17 実は、ヘロデは、自分の兄弟フィリポの妻ヘロディアと結婚しており、その
ことで人をやってヨハネを捕らえさせ、牢につないでいた。18 ヨハネが、「自
分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」とヘロデに言ったか
らである。19 そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、
できないでいた。20 なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であること
を知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、
なお喜んで耳を傾けていたからである。21 ところが、良い機会が訪れた。ヘロ
デが、自分の誕生日の祝いに高官や将校、ガリラヤの有力者などを招いて宴会
を催すと、22 ヘロディアの娘が入って来て踊りをおどり、ヘロデとその客を喜
ばせた。そこで、王は少女に、「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前
にやろう」と言い、23 更に、「お前が願うなら、この国の半分でもやろう」と
固く誓ったのである。24 少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」
と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。25 早速、少女は大急ぎ
で王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきと
うございます」と願った。26 王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、
また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。27 そこで、王は衛兵を遣わし、
ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの
首をはね、28 盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。
29 ヨハネの弟子たちはこのことを聞き、やって来て、遺体を引き取り、墓に納
めた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「先駆け」

イエスの名が広まるにつれて、その名は、ガリラヤ地方を支配していたヘロデ・アンティパスという人物の耳にも入るようになりました。

ヘロデはイエスのことを「わたしが首をはねたあのヨハネが生き返ったのだ」と言いました。

ヘロデが、自分が死刑にした洗礼者ヨハネの再来としてイエスが現れたと考えたのは、不当な死刑を行なったことに対する自責の念があったからでしょう。

洗礼者ヨハネが逮捕された理由は、自分の兄弟の妻ヘロディアと再婚したヘロデに、ヨハネが「自分の兄弟の妻と結婚することは、律法で許されていない」

と言ったからでした。

ヘロデは、ナバテアという国の王アレタ（アレタス四世…2 コリント 11:32）の娘と結婚していましたが、離婚して、異母兄の妻であったヘロディアと再婚しました。ヘロディアも前の夫と別れてヘロデと再婚したのです。

ヨハネの批判に対して、ヘロディアは、自分の立場を脅かすヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたものの、それを遂行できませんでした。夫であるヘロデが、ヨハネを捕らえたものの、その一方でヨハネを深く敬ってもいたからです。マルコ福音書にはこう記されています。

「なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである」（マルコ 6:20）。

しかし、ヘロディアの方は、なんとかヨハネを殺す機会を伺っていたのでしょう。そんな中、「良い機会」が訪れました。それは、ヘロデの誕生パーティでした。「高官や将校、ガリラヤの有力者」の前で、ヘロディアのはじめの夫との間の娘 —— ヘロデにとっては義理の娘 —— が踊りをおどり、ヘロデや客たちを大いに喜ばせました。

ヘロディアの娘の踊りには、観る者の心を掻き立て、魅了し取り込むような魔性の魅力があったのではないでしょうか。

酒も入っていたのか、ヘロデは、ここで極めて軽はずみな発言をします。彼は娘に「欲しいものがあれば何でも言いなさい。お前にやろう」と言ってしまったのです。

母ヘロディアと相談した娘は、ヘロディアが「洗礼者ヨハネの首を」求めたのに応えて、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」とヘロデに願い出ます。「今すぐに」とは、正規の裁判を回避して、この機会に一刻も早くヨハネの命を奪っておこう、という狙いでしょう。

ヘロデは自分の軽はずみな発言が引き起こした事態に困惑し、非常に心を痛めますが、「誓ったことではあるし、また客の手前」もあって、娘の要求に応じてしまいます。権力者ヘロデの命令は直ちに実行されました。

洗礼者ヨハネは正規の裁判も受けずに、ヘロデの誕生パーティーの余興のように、尊厳のかけらもなく、あっさりと処刑されてしまったのです。

神の言葉を伝える洗礼者ヨハネは、この世の低次元・低俗の極みの中で命を奪われるという不条理な最期を遂げました。

ヨハネは、その宣教においてイエスの「先駆け」であったように、その死においてもイエスの「先駆け」をしています。

ヨハネとイエスの道のりには、様々な共通点があると共に、対照的な点もあります。

共通点の一つは「権力者の手にかかって処刑される」というところです。

ヨハネはヘロデによって処刑され、イエスは総督ピラトによって処刑されました。

ですが、総督ピラトの妻は、ヘロデの妻ヘロディアとは対照的な女性です。

ピラトの妻は、夫のピラトに「あの正しい人に関係しないでください。その人のことで、わたしは昨夜、夢で随分苦しめられました」と、イエスを殺さないように懇願しました。（マタイ 27:19）

ヨハネは、ヘロデの妻ヘロディアただ一人の差金によって殺されましたが、イエスを死に追いやったのは、イエスの死を望む大勢の群衆によってでした。

イエスにまつわることは、その先駆者であるヨハネよりも、常に規模が大きいとも言えるでしょう。

本日の福音書の冒頭にあるように、ヘロデがヨハネを処刑したそののちに、イエスの名がヘロデの耳に入るようになります。

人々は、「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている」と言いました（マルコ 6:14）。

ヨハネは、死んでからもその存在を失いませんでした。肉体は滅びても、洗礼者ヨハネは人々の中に生き続けていたのです。

ヘロデは狼狽します。「わたしが首をはねたあのヨハネが、生き返ったのだ」。

ヘロデのこの言葉は、ヨハネを処刑したことへの自責の念からくるものだけではなく、ある真実を告げています。もちろんヨハネ自身が生き返って、墓から出てきたのではありません。しかし、ヨハネが語っていた神の言葉が、再びヘロデに聞こえてきたのです。

神は沈黙しません。ヨハネがもはや語ることができなくなっても、神はさらに語り続けます。ヨハネとは別の者、主イエス・キリストの口を通して、さらに神は語り続けるのです。

ヨハネがそうであったように、崇高な魂が、偉大なる者が、この世の低俗さ、卑小なるものの犠牲になるのは、この世において起こり続けていることです。ですが、そんな中でも、神は沈黙せずに語り続けているのです。

一見すると敗北し、無駄死にをしたかのようなヨハネですが、そうではありません。

「わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ福音書 16:33）。

主イエス・キリストのこの言葉は、ヨハネにも言えることであり、また、この世の不条理に苦しめられてきた、多くの心ある人々にも言えることなのです。

私は、本日の福音書を読んで、「再び」という言葉が浮かんできました。

「再び」という言葉は、「繰り返し起こること」を意味します。

「再び」という言葉から受ける印象は、人によって様々かもしれません。

ですが、「再び」という言葉は、希望のある前向きな言葉でもあるのではないでしょうか。

なぜなら、繰り返し起きるそのことは、全く同じことの繰り返しではないからです。

ヨハネとイエスの両者における「聖なる者が、人間の愚かさと悪によって死に追いやられる」という共通した道筋の中で、ヘロデの妻ヘロディアはヨハネを殺すように夫をそそのかしましたが、総督ピラトの妻はイエスに手を出さないようと夫に懇願したように、同じことの繰り返しのようでありながら、どこかで確実に進化・成長をしているのです。

また、「再び」とは、「再び会える」などの表現にも使われる言葉です。

ヘロデは、ヨハネを牢につなぎながらもヨハネを慕い、ヨハネの教えに戸惑いながらも喜んで耳を傾けていました。

ヨハネを通して神の言葉を聞くその機会が、自らの過ちと罪によって断ち切られてしまったヘロデでしたが、イエスの出現によって、ヘロデはヨハネに「再び会えた」のではないでしょうか。

今年ももう 7 月に入り、夏真っ盛りとなりました。

私たちの日々の生活の中でも、いつも再び神の恵みと、過去の過ちのやり直しと再出発の時が与えられ続けていることを覚え、祈りと共に喜びにあふれて歩んで行きましょう。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 アモス書 7 章 7 節―15 節（新共同訳）

[7]主はこのようにわたしに示された。見よ、主は手に下げ振りを持って、下げ振りで点検された城壁の上に立っておられる。[8]主はわたしに言われた。「アモスよ、何が見えるか。」わたしは答えた。「下げ振りです。」主は言われた。「見よ、わたしは／わが民イスラエルの真ん中に下げ振りを下ろす。もはや、見過ごしにすることはできない。[9]イサクの塚は荒らされ／イスラエルの聖なる高台は廃虚になる。わたしは剣をもって／ヤロブアムの家に立ち向かう。」

[10]ベテルの祭司アマツヤは、イスラエルの王ヤロブアムに人を遣わして言った。「イスラエルの家の真ん中で、アモスがあなたに背きました。この国は彼のすべての言葉に耐えられません。[11]アモスはこう言っています。『ヤロブアムは剣で殺される。イスラエルは、必ず捕らえられて／その土地から連れ去られる。』」[12]アマツヤはアモスに言った。「先見者よ、行け。ユダの国へ逃れ、そこで糧を得よ。そこで預言するがよい。[13]だが、ベテルでは二度と預言するな。ここは王の聖所、王国の神殿だから。」[14]アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。

[15]主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。

新約聖書 エフェソの信徒への手紙 1 章 3 節―14 節（新共同訳）

[3]わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。[4]天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。[5]イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。[6]神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。[7]わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。[8]神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、[9]秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。[10]こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。[11]キリストにおいてわたしたちは、御心のままにすべてのことを行われる方の御計画によって前もって定められ、約束されたものの相続者とされました。[12]それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。[13]あなたがたもまた、キリストにおいて、真理の言葉、救いをもたらす福音を聞き、そして信じて、約束された聖霊で証印を押されたのです。[14]この聖霊は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。

教会讃美歌 298 番「心まよいゆくをやめて」1,2,3 節、184 番「きよき石よ」1,2,4 節、107 番「血しおを流し」1,2,4 節、192 番「主イェスよ思いと」1 節